

【古文の通釈】

ある時、この青砥左衛門が、夜になって出仕したときに、いつも火打ち袋に入れて持っている錢を十文つかみそこなつて、滑川へ落としてしまったのを、わずかな物であるので、まあ仕方がないだろうと行き過ぎてしまうはずのところを、思いのほか慌てて、その辺りにある商人の家に人を走らせ、錢五十文で松明を十把買ってこさせ、これを燃やして、とうとう十文の錢を探し出した。後日これを聞いて、(ある人が)「十文の錢を探そうとして、五十文で松明を買って燃やしたのは、小利大損だなあ」と笑ったところ、青砥左衛門は眉をひそめて、「それだからあなたたちは愚かで、世の中の無駄遣いも知らず、民を哀れむ心がない人たちである。錢十文はすぐに探さなければ、滑川の底に沈んで、永く失われたであろう。私が松明を買わせた五十文の錢は、商人の家にとどまって、永く失われることはないであろう。私の損は商人の利益である。商人と私の間に何の違いがあろうか。結局六十文の錢を一つも失わない。(このことが)どうして世の中の利益でないと言えようか」と爪はじきをして申したところ、非難して笑っていたかたわらの人々は、舌を巻いて感心した。

【古文の通釈】

今は昔のことであるが、高忠という人が越前守のときに、たいへん不幸であった侍で、夜も昼も真面目に働いていた者が、冬なのに、帷を着ていた。雪がひどく降る日、この侍が、掃除をしようと言って、物が悪いのかのように震えるのを見て、越前守が、「歌を詠め。趣深く降る雪であるよ」と言うので、この侍が、「何を主題に詠みましょうか」と申したところ、「裸であることについて詠め」と言うので、間もなく震える声を張り上げて詠み上げる。

裸である私の身に降りかかる白雪(＝白髪)は、振り払っても(＝寒さで震えても)消せないことだよと詠んだところ、越前守はたいそう褒めて、着ていた着物を脱いで与えた。奥方もかわいそうに思って、薄紫色の着物でたいそう香りのよいものを与えたところ、二つとも受け取って、丸くまとめて、脇に挟んで立ち去った。(その侍が)侍所に行くのと、並んで座っていた侍たちが見て、驚き不思議がって尋ねると、このようなことと聞いて、驚き感心した。

さてこの侍が、その後姿が見えなかったので、不思議に思って、越前守が尋ねさせたところ、北山に貴い徳の高い僧がいた。(この侍は)そこへ行って、この手に入れた着物を二つとも渡して、言ったことには、「(私は)年をとって老いてしまった。我が身の不幸は、年を追って増えていく。この(現世での)一生は役に立たない身であったようでございます。来世だけでもなんとか(救われたい)と思って、法師になろうと思いますが、戒めを授けてくれる師に差し上げるべき物がございませんので、今まで過ごしてしまいましたが、このように思ってもみない物をいただいたので、この上なくうれしく思いまして、これをお布施に差し上げるのです」と言って、「(私を)法師にしてください」と涙にむせかえって、泣く泣く言ったので、徳の高い僧はたいそう貴いと思って、(侍を)法師にしたのだった。そしてそこから(法師になった侍は)行方もわからずいなくなってしまった。居場所はわからなくなってしまった。